

別宮貞徳と消費者運動

京都大学人間・環境学研究科／The Baker Street Bakery

大久保友博／大久保ゆう

◇クリエイティブコモンズ



表示 - 非営利 - 改変禁止 2.1 日本

あなたは以下の条件に従う場合に限り、自由に

*本作品を複製、頒布、展示、実演することができます。

あなたの従うべき条件は以下の通りです。

*あなたは原作者のクレジットを表示しなければなりません。

*あなたはこの作品を営利目的で利用してはなりません。

*あなたはこの作品を改変、変形または加工してはなりません。

(<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/2.1/jp/>)

執筆：2006年1月

(学位論文「翻訳研究序論——空白の強度と翻訳者の現象学」より抜粋)

PDF ファイル制作：2009年1月19日

発行：2009年1月19日

ホームページ：<http://www.alz.jp/221b/>

この日本という島国における第二次大戦後の翻訳史を考えた場合、外すことのできない事項がある。それが別宮貞徳という一人の人物が行った一連の翻訳批評のことであり、彼が日本の翻訳界に与えた影響は大きく計り知れない。翻訳者および編集者、出版社は彼の批評の対象とされることを恐れ、また消費者は毎回の批評を楽しみにしていた。この「欠陥翻訳時評」と題された批評は、翻訳学校を経営する株式会社バベルが所有する出版社、バベル・プレスが発行する『翻訳の世界』という翻訳者・翻訳家志望・編集者などを対象とした業界向けの雑誌に、1978年10月から1998年12月まで238回連載され、その時評を収録した単行本は12冊にのぼる⁶。ここでは毎回、そのとき書店の棚に並んでいる書物から〈これはあまりにもひどい〉翻訳書を取り上げ、欠陥を指摘するというスタイルがとられる。しかしこの時評もある側面からはやはり時代の産物であり、当時の事情というものを合わせて見なければ、単なる誤訳指摘という表面的な説明をつけて終わることになる。

時評の始まった1978年というのは、ちょうど高度経済成長が終わりを迎えるころである。この成長は日本という国を豊かにする一方で、様々なひずみを生み出すことにもなった。公害や欠陥商品による健康被害・環境問題もそのひとつであり、それに対して市民の側から立ち上がり始めたのも、この高度成長期の出来事である。多発する問題は、人々に自分たちは〈消費者〉であるという意識を持たせるようになり、ただ与えられるものを受けただけではなく、使う側、購入する側から意見を主張し、自分たちを危険なものから守ろうと運動を起こしていった。1957（昭和32）年、全国消費者大会によって出された「消費者宣言」には、このように記されている。

大衆への奉仕を考えない独占資本は権力と手を結び、一部業者を利用してカルテル化をはかり、消費者大衆の良い品物を適正な値段で欲しいという要望をふみにじって逆に高い値段で粗悪なものを私たちに押しつけようとしています。

ものの買手としての消費者、特に主婦の社会的責任は非常に大きい

です。もっと声を大きくして消費者の立場を主張しましょう。そして私たちの暮らしよい社会をつくろうではありませんか。(国民生活センター 1997: 59-60)

消費者運動を通じて、商品としての〈品質〉を考えると、それを適正な値段で適正に販売することが、メーカー側が持つべき倫理として考えられるようになっていった。消費者として団結した人々は不買運動を行ったり、価格を崩すような商品を率先して買うようになったり、法整備へ働きかけたりもした。また欠陥商品の調査や摘発、悪質企業への告発も行うようになる。当初は単なる個別的な指摘や反対運動であったものが、徐々に〈なぜそのような事件が起こったのか〉という原因や構造を追及していくようになり、それが企業体質や法制度、市場構造などへの具体的アプローチへとなっていく。

そういった運動が経済成長期には、その成長と手をつなぐかのように発展していき、そして石油ショック後、同じように停滞していく。しかしこれらの運動によって〈消費者〉という意識が持たれ、〈欠陥〉というものが商品にはあるということがはっきりと認識されたことは、疑いようのない事実であった。

ちょうどそのような時期に現れたのがこの「欠陥翻訳時評」であり、その第一回の文章は、そのことを如実に物語っている。

欠陥商品というものがある。運転中にハンドルが抜ける車、一度洗っただけでゴムが伸びるパンツ、けずってもけずってもしんが折れる鉛筆……翻訳も本になり人が買うものだからある意味では商品で、商品に欠陥商品があるごとく翻訳にも欠陥翻訳があるだろう——と一応は考えられる。(別宮 1981a: 8)

本は文化的に特権的な位置を占めるから、〈商品〉と扱うのはどうか、というような考えもある。何か偉いことが、難しいことが書いてあり、貴重な言葉が収録されているものであって、神聖絶対の領域である、とする立場もあるだろう。著作者という頭の賢い人々が書き、出版社が発行するものを、読者はた

だお金を払ってありがたく受け取ればよい。もしそのように〈本〉というものが位置付けられるのであれば、それは消費者運動が反抗した、メーカーと消費者の搾取構造であることには変わりはない。もしそのような構造があるならば、消費者運動のひとつとして、大々的に行われることもありえたはずである。

しかし〈本〉というものは「いのちにかかわ」らないし、「消費者にせつばつまった実害が及ぶわけではない」（別宮 1981a: 8）。もし欠陥があったとしても、それを発見するには知識と経験が必要であり、消費者に容易にわかるものではない。また〈本〉は誰でも使う日用品でもない。運動としての普遍性にも欠けていれば、緊急性も少ない。であるから、あまり大きくは取り上げられない。

確かに、この「欠陥翻訳時評」が始まる前にも誤訳指摘はいくたびかあった。消費者運動の盛んな1967年に、グロータースという外国人講師によって『誤訳』という本が出版され、話題となったこともある。またそれに続くように、1971年には『誤訳 悪訳の病理』、1975年には『翻訳上達法』と、誤訳をターゲットにした本がぽつぽつと出版されたが、大きなうねりとなるには至らない。

そのような中、「欠陥時評時評」は挑戦的に現れる。その第一回目では、当時の大ベストセラーであったガルブレイス『不確実性の時代』の翻訳をターゲットにして〈欠陥〉であると糾弾し、あっという間に世間の話題をさらってしまう。一年ほど先立つ『英語教育』誌の読者投稿型の誤訳指摘連載をさしおき、この「欠陥翻訳時評」が80年代の〈誤訳指摘ブーム〉ともいえよう現象に火をつけ、人々に〈翻訳〉への興味を沸かせる端緒となったといってもいいだろう⁷。

まずは、この「欠陥翻訳時評」の基本的姿勢についてまとめてみよう。

1. 製造者側でもある翻訳者の、自主規制的意味あいがある⁸。
2. 対象とする本はあくまでも現在販売中のもので、なおかつ、ひとつやふたつの誤訳があるようなものではなく、無数（何百・何千）の誤訳・悪文にまみれ、弁解の余地がないような欠陥品に限る。
3. その欠陥の基準は、消費者運動という表現体の上では、〈消費者〉つまり

〈読者一般〉が理解できるかどうか、別宮個人の思想としては〈立派な日本語〉になっているかどうか（この曖昧さのうちでしばしば揺れる⁹⁾）。

4. 問題の原因を、翻訳者と出版社が作る権威的な構造に置き、個人を非難するものではなく、責任の所在は主として出版社へ向ける。
5. だが、その構造を受け入れるような訳者においては、その限りではない（その構造の悪用、偽善的使用を問う）。

この時評を始めた当時、別宮はすでに訳書がいくつもある翻訳者であった。またそれまでも翻訳業界をなげくような文章を幾度かものしたことがあり、そこからこの時評の執筆を依頼されたのであろう。当初は、幾人かの翻訳者で分担して連載する予定であったことも、〈自主規制〉と第一回の連載で定義された理由かと思われる。またこの〈自主規制〉というのには、少し前にも述べたように〈消費者〉では摘発が難しい、という考えが背景にあることは間違いない。それも、ただ英語などの外国語の知識があるだけではなく、翻訳の〈技術〉を持っていたはじめて、欠陥を摘発できるという思想である。

この〈知識〉の問題とするか、〈技術〉の問題とするかという違いが、この時評を語る上で重要な点となってくる。これも第一回の記述から引いてみると、

直訳が忠実、など言語道断。日本語としておかしければ、それも欠陥ということになる。これも以前書いたことだが、だいたい悪訳には二つのジャンルがある。一つは言語解釈上の悪訳、一つは日本語表現上の悪訳。このうち前者は一過性だが後者は慢性で根が深い、と私は考えている。

（別宮 1981a: 10-11）

〈知識〉というのは、外国語が理解できるかどうか、という次元のことであり、〈技術〉というのは、きちんと言語措定をして、狙う表現体の中へ目標テキストを訳出することのできる能力があるかどうか、というレベルの話である。この時評では前者は〈誤訳〉と、後者は〈悪訳〉としばしば区別される。別宮は、明らかに後者を問題視していて、この措定の目標言語側にあるのが〈消費

者〉であり〈立派な日本語〉なのである。連載第四回では、このようにも語っている。

私はいわゆる誤訳より悪訳の方がよほど罪が重いと考えている。[中略]
誤訳なんてハシカみたいなものだが悪訳はガンだともいった。ハシカやガンというのには実は二重の意味がある。つまり、読者と訳者の双方にとってということ。訳者にとっても、誤訳はハシカのように誰も避けられないがその場限りのものであるのに対し、悪訳はガンのごとく命にかかわる。

(別宮 1981a: 30-31)

そして誤訳ばかりが問題にし、悪訳を重要視しない反論者に対して「もっと恐ろしい」(別宮 1981a: 31)と述懐する。もちろん、指摘された本人にとって、誤訳は自分の〈知識〉を攻撃されたものと感じるため、感情的な対応をすることもありえよう。しかし翻訳の〈技術〉に対しての認識がなければ、文章に対する指摘がされようと、特に痛くも痒くもないのかもしれない。〈立派な日本語〉、読者の解る文へと訳出されることを望むとき、別宮の中では理想的な言語措定と翻訳空間が存在し、それから大きく外れるようなものを、欠陥として指摘していくこととなる。

訳者はいったいこの意味がほんとうにわかっているのだろうか、かりにわかっているとして、こんな訳で読者に十分意味が伝わっているのだろうか、そもそも読者に十分意味をわからせようという気があるのだろうか、そして、編集者はこれを読んで何とも思わなかったのだろうか。(別宮 1981a: 16)

起点テキストでは読んでわかるはずのものが、目標テキストでは読んでもわからないものになってしまう。そういった読者を向いていないような翻訳、措定が、表現体が読者に向けられていないような翻訳を、別宮は非難する。「本国の高校生でもわかるはずの文章が、われわれにも理解しかねる訳になっている

るところが問題なのだ」(別宮 1983a: 123-124)。一般読者が読めること、目標言語側の措定を徹底的に絞り込むこと、翻訳空間を強く持つことによって、批判の根拠を得る。これまで翻訳は単に言葉を基準にして単純な誤訳ばかり問われてきたが、そこに〈読者〉という観点を持ち出し、新しい翻訳批評への道を開いたのである。このとき、別宮は多くの消費者運動と同様に、矛先をメーカーへ向ける。少なくとも、編集者は最初の読者である。だから、それを読んで、間違いがあれば直し、不適切であれば出版を取りやめるような判断をすべきである、と。訳者に責任があるのではなく、出版社に責任があるというのが、初期のスタンスであった。そのため、はじめのあたりでは、連載・単行本ともに訳者の名前を出すことはしていない。

〔訳者に〕道義的責任はない。／むしろ、道義的責任は出版者の方にあるのではないか。いったい版元の編集者は、読者第一号としてこの翻訳にどんな印象を持ったのだろうか。おかしいとは思わなかったのだろうか。そもそも、書いてあることが理解できたのだろうか。おかしいと思いつつ、あるいは、わからないながら、訳者の自身に負けたか、何かの圧力に屈したか、義理人情にしばられたかで、そのまま通してしまったのなら、編集者としての権威に欠ける。おかしいところ、わからないところは容赦なく指摘して、徹底的に改めさせ、場合によっては出版を見合わせるのが、編集者の見識であり、そのきびしさが、読者に対してはもちろん訳者に対してもかえって親切なのではなかろうか。(別宮 1981a: 88-89)

これは連載第八回『楽想のひととき』へのコメントである。ここでまだ別宮は単なるメーカー非難しかしていない。第九回『何のための化学か』では「はっきりいって版元は訳社の人選を誤った。科学書ということで安直に科学者に翻訳をまかせたのが、そもそものまちがいではなかったか」(別宮 1983a: 208)、第二十四回『脱クルマ社会』では「この本を商品としてお出しになったのは、ほかならぬあなた方です」といい、第三十一回の『バチカンターゲット』でも

「出版部の皆さん。[中略] ひとしきりお笑いになったら、そのあと何とかなさるべきじゃありませんか」（別宮 1983a: 51）と、また第三十四回『わが内なる暴力』でも編集部に対して、「訳者に英語の能力も、論理的な判断力も、平均的な常識教養もないことがおわかりになりましたか。おわかりなら、さてどうなさる？」（別宮 1983a: 22）という発言をする。さらに第四十二回『化石の意味』では少し広げて「読者をこれほど愚弄した訳者、出版者、書評者に、今度という今度は怒り心頭。大枚四千五百円を投じてこの本を買った読者にいったいなんと言って謝るつもりですか」（別宮 1983a: 95）となるが、これも消費者問題、関係者全員ひっくるめてメーカーとした製造側責任の範疇であり、事実この回に取りあげられた本は回収されている。だが、これが徐々に変化していくこととなり、この〈圧力に屈する〉構造そのものに矛先を向けるようになる。これも消費者運動の変化の過程をそのままなぞるようでもあるのだが、こういった欠陥品への指摘を積み重ねていくうち、指摘者が何かに気づく。欠陥品が生まれる原因には、ある一定の共通性があるのではないだろうか、と。別宮の場合は、その指摘される欠陥品が、どういったジャンルに属しているか、どういう訳者によるものか、という傾向に気づいたことにあるだろう。そのことは毎回の連載や第二十五回の「「欠陥翻訳」再考」でもしばしば触れられているが、最初のうちはまだメーカー責任の枠から抜け出てはいない。もし大きな転換点を挙げられるとすれば、1985年の1月号で長く続いた連載を振り返った総集編あたりからである。その中で別宮は、これまで欠陥として取り上げた翻訳書を分類する。すると、自然科学、哲学・倫理・心理・歴史、経済・経営、政治社会・社会といったいわゆる〈人文書〉が圧倒的上位を占め、それに比べて文学などのジャンルは本の少しに過ぎない。

この総集編前後において〈気づき〉があってから、別宮の筆はそれまでとは一変する。なぜ〈人文書〉において欠陥翻訳が多いのか。それは、そこに欠陥を生み出す構造があるからではないか。そして、もしその構造に対して、訳者にもそれを産み出す責任があるとすれば、訳者の資格をも問わねばならなくなる。1985年に出版された『こんな翻訳は読みたくない』『翻訳と批評』の二冊の本。ここに別宮の気づいた構造と、それへの強い批判が始まる。

大学の先生たちが欠陥翻訳時評をずいぶん気にしているという話を聞いた。はっきり言って、誰も屁とも思わないようなことなら書いたってしようがない。欠陥翻訳の張本人は学者先生と見てほぼまちがいないところで、その人たちがびくびくするのは、ある意味でこちらのねらいでもある。(別宮 1885a: 282)

そう、学者である。〈ベック剣士〉とも呼ばれた批評家は、その批判のターゲットを明確に定め、その構造に向かって切っ先を向ける。しっかりと能力があり、うまく翻訳ができているなら、何をびくびくすることがあろう。このような細々とした辛口の批評など、どの分野でもよくあることであるし、批評に奮起することはあるとしても、いつも批評にびくびくしているものがスポーツや芸術の表舞台にふつういるものなのか、といぶかりながら。

ところが、翻訳の世界にはそういう人がうじゃうじゃいる。実際には才能がない。プロとしての——つまり、金をとれるだけの——器量に欠けている。にもかかわらず、いかにもあるような顔をして、翻訳をやり、金をとる。そして、なにか言われるかもしれないとびくびくする。これがヘンでなくてなんと言う？ (別宮 1985a: 284)

文学やエンタテインメントの翻訳には、プロの翻訳家が従事しているので、あまりひどい翻訳はない。しかし人文書や一部の純文学では、ろくに〈技術〉のないような人が、翻訳家でござい、とすました顔で翻訳をする。そのすまし顔の翻訳者の多くが学者であった当時の状況を、別宮は非難する。その非難の向かう先は、〈技術〉がないのに〈知識〉があるだけで翻訳をしようとする、大勢の学者たちであった。自分に翻訳の技術があるという思いあがり、自分が賢いという傲慢さ、そして翻訳という仕事に関しての意識の浅さ。ただ〈えらい〉というだけで翻訳をなし、そしてその〈えらさ〉のために編集者は翻訳について何も注文がつけられないというのなら、そのような翻訳者など要らない。

誰も何一つ文句を言わない。それをいいことに、先生づらで翻訳に手をつける。翻訳をすればまた箔がつく。誰も文句を言わないからいい気になってまたまた翻訳をする。その結果できあがった状況は、本書でごらんのとおり。誰しも啞然たらざるを得まい。誰かが文句を言わない限り、この流れはとめられない。少しはきき目があって、びくびくするなら、そういう人は一切翻訳から手を引いていただきたい。才能のある人——大学教授のように「えらく」はないが、大学教授よりよほどできる人——はたくさんいる。(別宮 1985a: 284)

もちろん大学教授にも翻訳のうまい人はいる。しかし別宮のねらいは「さしあたってプラスをふやすよりマイナスを切り捨てるのが先決」(別宮 1985a: 282) というところにある。世の中には欠陥があふれていて、見事なものを取り上げるよりも、あまりにもひどいものを取り上げ駆逐しないことには、翻訳は程度の低いものと見続けられ、また翻訳者の社会的地位も低いままである。

別宮は、意識の低い学者翻訳を徹底的に攻撃する。それは単に通俗的な楽しみを意図したものではない。「本気で、相手をフォールするつもりで書いている」(別宮 1985a: 196) と、いう。それを凡ミスがあるような翻訳書に対して行ったなら、悪趣味な挙げ足取りに終わるだろうが、別宮はそのような行為にも風潮に対しても、手厳しい。

どうも一部読者の間には、誤訳すなわち欠陥翻訳、というとんでもない思いこみがあるようで、そのためにちょっと怪しい箇所^{あや}を見つけると鬼の首でも取ったような気になるのだろうが、そういう考えは即刻捨てていただきたい。読者からの欠陥翻訳情報は、[中略] ほとんどが、その意味では、欠陥情報と言っていい。[中略]

翻訳は知的なパズルである。だから、かりに二十、三十のミスを見つけても、[中略] ひとり悦^{えつ}に入るなり、あるいは、ひとにそれを話すにしてもパズルとして伝えるなりすればいいわけで、なんたることかと

ひふんこうがい
悲憤慷慨したり、軽視蔑視^{べっし}することはない。

これ〔翻訳上のミス〕が桁^{けた}はずれに多くなれば、つまり、二十、三十、五十、六十が、数百から千を超すというように文字通り桁がちがってくれば、もう笑ってはすまされない。それは翻訳以前のもの、翻訳書として存在することが許されないものである。(別宮 1985b: 111-112)

「故意ではなくとも結果としてはなほだ悪どいことをやっているえせ紳士」(別宮 1985a: 263) と呼ぶ学者たちを、この1985年の単行本から、実名公表することに切り替える。訳者として、商品としての翻訳の品質に責任を持つとしない学者たち。それは自分が翻訳する場合においても、また監訳者として下訳の監修をする場合においても同様である。〈立派な日本語〉を書けない学者、下訳からあがってきた原稿をろくにチェックしない監訳者という看板だけの学者、どちらにも、翻訳者としての資格はない、と。別宮は『翻訳と批評』で、当時の学者の語学力について、このようにこきおろしている。

大学の先生なら外国語もよくできるだろうと、世間では考えられているようだが、それはまったく根拠のない偏見である。文学以外の学問研究には、外国語が拔群にできる必要はない。外国の学説、外人学者の著述の大要が理解できれば用は足りるし、逆に、外国語についてそれだけの能力しかなくても、専門の学者として恥じるには及ばない。日本語を書くとなると、これはさらに別の能力である。つまり、大学教授とはいっても、翻訳に絶対必要な、拔群の外国語読解力、日本語表現力を持っている保証はまったくないことになる。(別宮 1985b: 116)

よく言われるように「翻訳の才能は英語の知識とは別」(別宮 1985b: 117)である。その意識がないということに対して、別宮は不満を感じている。

誰もかれも翻訳を安易に考えすぎる。〔中略〕プロの作家が自作の小説のあとがきに「行き届かぬ表現も多々あるにちがいない」と書いてのは

ほんとしてはいられまい。翻訳だからそれが許されると考えるこの甘えのひどさ。／ なぜ、自分でもうまくいかないと見とめられるようななれない仕事をむりして引きうけるのだろう。(別宮 1983a: 116)

翻訳が誰にでもできるような仕事だと一般に思われ、またその感覚でもって、何も考えずに翻訳に取り組む。

ところが実際はちっとも結構じゃない。世の翻訳者の多くは、どんな立場をとるでもない、何の哲学を持つでもない、翻訳について真剣に考えることなど少しもない、ただ漫然と文法書と辞書をたよりにことばをうつしかえているだけ。その結果およそ日本語とはいえないわけのわからない訳文になっても、翻訳とはそんなもの、なんて涼しい顔をしている。ほんと腹が立つよ。(別宮 1986: 41)

第五十五回、サイクス『世界探検史』においては、出版者ではなく、そういう意識の低い監訳者の責任を問うている。下訳者が水準以下の訳文を持ってきても、監訳者は何もしない。単行本ではもちろん名指しされ、監訳者あとがきで本人が当該の本を名著であると誉めているだけに、なおさら厳しく問い詰める。

先生は、本を世に出すことの重みを真剣にお考えになったことがあるのでしょうか。それは印税をかせぎ、業績をあげる手段ではないのです。まして、自分は何もしないで、それが手に入るというワリのいい仕事ではありません。先生は、訳者はしがきで、サイクスのこの著書を高く評価しておいでになる。ほめればほめるほど先生の罪は深くなるわけです。原著者に対して、そして数多くの著者に対して。いつわりの著者像を伝え、読者にでたらめを教えた責任は、先生にあります。断じて、訳を担当した卒業生諸嬢〔下訳者〕にはない。訳者としてこの本に載っているのは、先生の名前なんですから。(別宮 1985a: 156)

別宮は、学者による有名無実の監訳者という構造を強く批判する。第六十五回では、欠陥翻訳が生まれ、そしてそれが売れてしまう構造をこのように指摘している。

翻訳がいいから売れたんじゃない。授業に使うからですよ。大学の先生は結構なもので、ロクな翻訳でなくても教科書にすれば、いながらにして買手がつく。編集者もペコペコしてくれる。いや、翻訳のやり方だっていい加減なものです。ちょっとあちらで評判になった本をゼミか何かのテキストにし、そのあとで「この本、翻訳したいが」と出版社に持ちかける。出版社は、エライ先生の言うことだし、義理もあるからと引き受ける。ところが先生の方は、忙しいとかなんとか言って、ゼミの学生や弟子、妻子まで狩り出して下訳をやらせ、自分はちょっと目を通しただけで本にしてしまう。もちろん訳者名は自分です。しかし、ご自分だって翻訳の才能があるわけじゃなし、まして無能な学生や弟子にまかせていい訳ができるわけがない。(別宮 1986: 67)

本というのは不思議なもので、自分よりも本の方がえらいと考えてしまう人もいる。何か本にはありがたいことが書いてある。有名な人物、あるいはえらい学者が書いているのだから、ここにはすごいことが書いてあるに違いない。でも、読んでも読んでもわからない。わからないのは、きっと自分の頭が悪いからだ。もしそのように考えるのであれば、欠陥というものは姿を表さないままであろう。別宮は、本を読んでわからないのは、読者の頭が悪いからなのではない。翻訳が悪い、訳者が悪い、とする。そしてそのような〈ありがたがる〉読者の上にあぐらを書いて、欠陥を生み出す訳者を糾弾するようになる。

読者が自分の頭が悪いからわからないだろうと思うのはバカな話で、頭が悪いのは訳者のほうにきまっている。(別宮 1986: 256)

このように第八十七回で発言したのは、それほど世に欠陥翻訳ばかりがあふれている、と別宮が認識していたということでもある。当初は出版社、編集者に対してのみ非難の声をあげていたのが、学者に向かうようになり、そしてその学者による翻訳をそのまま通してしまうことに加えて、学者の権威に負けてしまうことも、出版社、編集者への批判に加わってくるようになる。

欠陥翻訳を生む最大の原因は権威主義——訳者は権威の御旗をふりかざし、出版社は権威のご紋をありがたがることに存する。(別宮 1988: 135)

事実、そういった指摘によって欠陥翻訳の俎上に乗せられた本の担当編集者や出版社から謝罪と反省の手紙などが幾度か連載中に届いている(別宮 1986, 1988, 1991)。しかし、それらの批判は必ずしもある特定の訳者、出版社、編集者にだけ向かっているのではない。そのたびそのたびの対象とされるのは、その欠陥翻訳を作った訳者、出版社であり、毎回、全精力を傾けて欠陥を指摘しているのは事実である。だが、あくまでも批判したいのは〈構造〉である。誰かの欠陥翻訳を見ることによって、あるいは世に知らしめることによって、〈技術〉のない者が翻訳をやろうなどという、浅い考えを起ささないようになること。下訳者に任せて、監訳者は何もせず、欠陥翻訳を生み出すような状況がなくなること。出版社、編集者が翻訳の質に気をつけるようになって、これからは欠陥翻訳に対しては毅然な態度を取るようになること。別宮は著書『翻訳と批評』の終章で、冒頭に以下の文章を置き、訳者、出版社、読者に意識の改善を求める。

日本は翻訳天国とよく言われる。しかし、これは決して日本がすぐれた翻訳を数多くうみ出す国であることを意味しているのではない。単に、翻訳書の出版点数が多いことを示すにとどまる。たしかに、その点では世界でも指折りの国であるらしい。これだけ翻訳がさかんなことは、好奇心、知識欲の強さを示すもので、それによって日本人の知的水準が高

められたことは大いに評価すべきだが、反面、悪質な翻訳のため読者が不当な苦痛をしいられ、多々誤解を生じたことも事実である。功は功とし、罪は罪として反省しなければなるまい。そして、悪質な翻訳が、程度といい量といい、想像を絶するものであることを、ぼくはすべての人に訴えたいのだ。ただ訴えるだけでなく、自分でもなんとかしたい。少しでも悪質な翻訳を減らしたい。そのためにこそ、^{とうろう}蠅^{おの}の斧のような形ながら今まで批評活動をおこなってきたのだし、これからもつづけようと思っている。ここまでこの本を書いてきたのもその願望のあらわれである。目的は一点に集約される。少しでも翻訳書の質を向上させること。

(別宮 1985b: 235)

「欠陥翻訳時評」は1998年、およそ20年にわたって連載を続けたのち、〈休載〉という形で終わりを迎える。その効果は絶大であった。本の大衆化の流れも相俟って、新刊書に含む〈欠陥翻訳〉と別宮が定義したものの割合は、一時よりも大幅にその数を減らした。読者へ向けた〈読みやすい〉翻訳が増え、また、翻訳者になるには〈権威〉や〈知識〉ではなく〈技術〉が必要であるという考えも、以前よりは広まった。人気翻訳家なるものも登場し、翻訳家ひとりに対して一冊の評論書が出るまでにもなった。〈翻訳〉というものについての社会的認知の過程を考えたとき、この時評がひとつの里程標となっていることは、疑いようもない。

だが、翻訳書評についてはどうだろうか。別宮貞徳ののち、建設的で翻訳の内容そのものについて踏み込んだ同時代的な批評は、およそ目立ったものが出ていない。別宮もその最終回で、常に孤独な闘いであり、ついに誰も引き継ぐ者もなく終わることについて嘆いている。

時代が変わったということであろうか。消費者運動という表現体が古くなったからであろうか。

たとえそうであったとしても、古き価値ある物のあとには、また新しい翻訳書評が生まれなければなるまい。もし翻訳書の質が向上したのであれば、良い翻訳について語るすべを探さなければいけない。多くのすぐれた翻訳から、そ

れをどのように選び出し、どのように語り、どのように伝えていくかは、これからの課題となってくるだろう。

そのためにも、翻訳研究は基礎研究として、しっかりと翻訳の仕組みや構造をしっかりと分析しておかなければならない。ただ漫然と翻訳について語るのではなく、理論に基づき、専門的ではない人にもわかるような、平易な批評もできるようにならなくてはいけない。

それこそ、一人で勇敢にも戦いつづけた、偉大なる先人への敬意を表するものではないだろうか。

注釈

⁶ 「欠陥翻訳時評」が取り上げた書籍の全リストは、以下の通りである。この表は（別宮 1993）および（別宮 1998）を元に、追加・修正を加えたものである。連載回、収録号の年月、書籍データ、収録単行本の順に記されている。収録単行本はすべて略記号によるが、それぞれの対応は次のようになる。

[正] = （別宮 1981a）、[続] = （別宮 1983a）、[読] = （別宮 1985a）
 [誰] = （別宮 1986）、[悪] = （別宮 1988）、[穴] = （別宮 1989）
 [嘘] = （別宮 1991）、[辛] = （別宮 1993）、[矢] = （別宮 1996b）
 [大] = （別宮 1996c）、[批] = （別宮 1985b）、[特] = （別宮 1996a）

[表2-2] 「欠陥翻訳時評」全連載リスト

001	1978/10	ガルブレイス, ジョン・K (1978) 『不確実性の時代』 (都留重人 [監訳]) TBSブリタニカ [正] [特]
002	1978/11	バーネット (1978) 『変わりゆくパターン バーネット自伝』 (和気朗 [訳]) 東京図書 (執筆者: 村上陽一郎)
003	1978/12	トールキン, J・R・R (1965) 『ホビットの冒険』 (瀬田貞二 [訳]) 岩波書店 [正]
004	1979/01	欠陥翻訳時評に答えて (都留重人からの反論) [正]
005	1979/02	ふたたび 『不確実性の時代』 [正]
006	1979/03	ヴォロンツォフ, A・I、N・Z・ハノトリーバ (1972) 『自然環境の保護 公害理論と実際』 (杉山利子 [訳]) ラティス、丸善 (執筆者: 生野一路)
007	1979/04	ファリス, ジョン (1978) 『フューリー』 (田中亮 [訳]) 三笠書房 [正]
008	1979/05	ブレンデル, アルフレッド (1978) 『楽想のひととき』 (岡崎昭子 [訳]) 音楽之友社 [正] [特]
009	1979/06	ディクソン, バーナード (1977) 『何のための科学か』 (増田

		幸夫、塩川久男 [訳]) 紀伊國屋書店 [続]
010	1979/07	バーガー, ピーター・L (1976) 『犠牲のピラミッド 第三世界の現状が問いかけるもの』(加茂雄三、山田睦男、乗浩子 [訳]) 紀伊國屋書店
011	1979/08	バージェス, アントニイ (1979) 『聖ヴィーナスの夕べ』(鈴木建三 [訳]) 早川書房 [正]
012	1979/09	メニューイン (1979) 『果てしなき旅 メニューイン自伝』(和田旦 [訳]) 白水社 [誰]
013	1979/10	ウィンター, ルース (1978) 『匂いの本』(真野啓二 [訳]) 竹内書店新社 [正]
014	1979/11	アルチュセール, L (1978) 『自己批判 マルクス主義と階級闘争』(西川長夫 [訳]) 福村出版 (執筆者: 加藤晴久)
015	1979/12	ポパー, K (1978) 『果てしなき探求 知的自伝』(森博 [訳]) 岩波書店 [正]
016	1980/01	『自己批判』の訳者の自己批判 (西川長夫からの反論)
017	1980/02	リンド, R・S (1979) 『何のための知識か 危機に立つ社会科学』(小野修三 [訳]) 三一書房 [正]
018	1980/03	ウォーノック, M (1979) 『二十世紀の倫理学』(保田清 [監訳]) 法律文化社 [読]
019	1980/04	キスラー, S・E (1978) 『限りある資源』(石原舜三 [訳]) サイエンス社 [続]
020	1980/05	バット, D・S (1978) 『文明としてのスポーツ ヒーローの心理学』(浅田隆夫、松田義幸 [訳]) 日本経済新聞社 [正]
021	1980/06	フロム, エーリッヒ (1971) 『夢の精神分析 忘れられた言語』(外林大作 [訳]) 東京創元社 [正] [特]
022	1980/07	1980年度 大学英語入試問題 [正] [大]
023	1980/08	デビッドソン, B [ほか] (1979) 『南部アフリカ 解放への新たな戦略』(北沢正雄 [ほか訳]) 岩波書店 [読]
024	1980/09	ベンディクソン, テレンス (1980) 『脱クルマ優先社会』(植

		松重信 [訳]) 時事通信社 [続]
025	1980/10	「欠陥翻訳」再考 [続]
026	1980/11	ウィリアムズ, レイモンド (1980) 『キーワード辞典』 (岡崎康一 [訳]) 晶文社 [続]
027	1980/12	ラッセル, B (1962) 『人類に未来はあるか』 (日高一輝 [訳]) 理想社 [正] [特]
028	1981/01	セヴェリン, ティム (1979) 『ブレンダン航海記』 (水口志計夫 [訳]) サンリオ [正]
029	1981/02	セイガン, カール (1976) 『異星人との知的交信』 (金子務、佐竹誠也 [訳]) 河出書房新社 [正]
030	1981/03	キャラハン, P・S (1980) 『自然界の調律 昆虫・赤外線・太陽エネルギー』 (奥井一満 [訳]) 海鳴社 [続]
031	1981/04	シフ, バリー、ハル・フィッシュマン (1979) 『バチカン・ターゲット』 (中村定 [訳]) C B S ソニー出版 [続]
032	1981/05	グリフィン, D・R (1979) 『動物に心があるか 心的体験の進化的連続性』 (桑原万寿太郎 [訳]) 岩波書店 [誰]
033	1981/06	1981年度 大学英語入試問題 [大]
034	1981/07	メイ, ロロ (1980) 『わが内なる暴力』 (小野泰博 [訳]) 誠信書房 [続]
035	1981/08	フォート, J (1980) 『アルコール症 隠された薬物問題』 (逸見武光 [監修]、大森正英 [訳]) 東京大学出版会 [読]
036	1981/09	ブライソン, R・A、T・J・ムーレイ (1980) 『飢えを呼ぶ気候 人類と気候変動』 (根本順吉、見角鋭二 [訳]) 古今書院 [続]
037	1981/10	サルバドリー, マリオ (1980) 『建物はどのようにして建っているか 構造——重力とのたたかい』 (望月重 [訳]) 鹿島出版会 [続]
038	1981/11	ネヴィンズ Jr., フランシス・M (1980) 『エラリー・クイーンの世界』 (秋津知子 [ほか訳]) 早川書房 [続]

039	1981/12	スミス (1974) 『スミス 国富論』 (水田洋 [訳]) 河出書房新社 [続] [批] [特]
040	1982/01	マコビー, M (1978) 『ゲームズマン 新しいビジネスエリート』 (広瀬英彦 [訳]) ダイヤモンド社 [読]
041	1982/02	クラーク, R・W (1980) 『エジソンの生涯』 (小林三二 [訳]) 東京図書 [読]
042	1982/03	ルドウィック, マーチン・J・S (1981) 『化石の意味 古生物学史挿話』 (大森昌衛、高安克己 [訳]) 海鳴社 [続]
043	1982/04	レア, ジョン (1979) 『組換え DNA 秘話』 (新井俊彦 [訳]) 共立出版 [続]
044	1982/05	「欠陥翻訳時評」の欠陥 (水田洋からの反論) [続] [批]
045	1982/06	ポランニー, カール (1981) 『経済と文明 ダホメの経済人類学的分析 新版』 (栗本慎一郎、端信行 [訳]) サイマル出版会 [続]
046	1982/07	1982年度 全国大学英語入試問題 [続] [大]
047	1982/08	セネット, リチャード (1975) 『無秩序の活用 都市コミュニティの理論』 (今田高俊 [訳]) 中央公論社
048	1982/09	マイアース, N (1981) 『沈みゆく箱舟 種の絶滅についての新しい考察』 (林雄次郎 [訳]) 岩波書店 [読]
049	1982/10	ロビンソン, ジョーン (1966) 『経済学の考え方』 (宮崎義一 [訳]) 岩波書店 [読]
050	1982/11	デュカス, H、B・ホフマン [編] (1979) 『素顔のアインシュタイン』 (林一 [訳]) 東京図書 [誰]
051	1982/12	「欠陥翻訳時評」 by the reader
052	1983/01	テイラー, G・R (1976, 1977) 『生物学の歴史 I・II』 (矢部一郎、江上生子、大和靖子 [訳]) みすず書房 [穴]
053	1983/02	アダム, レオナード (1976) 『原始美術』 (石田義則 [訳]) 大陸書房 [読]
054	1983/03	デザイン委員会、イギリス都市計画協会 [編] (1980) 『新し

		い街路のデザイン』(中津原努、桜井悦子 [訳]) 鹿島出版会 [読]
055	1983/04	サイクス, パーシー (1974) 『世界探検史 上・下』(長沢和 俊、上村盛雄 [訳]) 社会思想社 [読] [特]
056	1983/05	パウロス, ジョン・A (1982) 『数学とユーモア』(橋本英典 [訳]) 紀伊国屋書店 [読]
057	1983/06	1983年度 大学英語入試問題 [大]
058	1983/07	シュマッハー, E・F (1977) 『人間復興の経済 新訂』(斎 藤志郎 [訳]) 佑学社 [読]
059	1983/08	リフキン, ジェレミー (1982, 1983) 『エントロピーの法則 1・2』(竹内均 [訳]) 祥伝社 [誰] [特]
060	1983/10	ポスト, ヴァン・デル (1982) 『はるかに遠い場所』(井坂義 雄 [訳]) サンリオ [読]
061	1983/11	ジェンクス, C (1978) 『ル・コルビュジエ』(佐々木宏 [訳]) 鹿島出版会 [読] [特]
062	1983/12	グレイ, コリン・S (1982) 『核時代の地政学』(小谷豪治郎 [監修]、小島康男 [訳]) 紀尾井書房 [読]
063	1984/01	トゥルミン (1976) 『科学哲学へのいざない 常識の眼・科 学の眼・哲学の眼』(藤川吉美 [訳]) 東京図書 [読]
064	1984/02	ブレンデル, アルフレッド (1978) 『楽想のひととき [第四 刷]』(岡崎昭子 [訳]) 音楽之友社
065	1984/03	ブラウン, レスター・R (1983) 『地球の復活』(唯是康彦 [訳]) 東洋経済新報社 [誰]
066	1984/04	ローレンス (1957) 『ローレンス短篇集』(岩倉具栄 [訳]) 新潮社 [読]
067	1984/05	マキントシュ, ピーター (1983) 『フェアプレイ スポーツ と教育における倫理学』(水野忠文 [訳]) ベースボール・マガ ジン社 [読]
068	1984/06	番外編「欠陥〈翻訳批評〉評」

069	1984/07	1984年度 大学英語入試問題	[読] [大]
070	1984/08	クラブ, O・E (1983)『情報エントロピー 開放化と閉鎖化の適応戦略』(小林宏一、川浦康至 [訳]) 新評論	
071	1984/09	ポー, エドガー (1977)『モルグ街の殺人事件 改版』(佐々木直次郎 [訳]) 新潮社	[読] [特]
072	1984/10	メニングァー, K (1979)『刑罰という名の犯罪』(内水主計 [訳]) 思索社	[誰]
073	1984/11	シェアド, J・A (1980)『英語の語彙の研究』(大沢銀作 [訳]) 文化書房博文社	[誰]
074	1984/12	フラハティ, ジョン・E (1980)『企業家精神と経営戦略』(中村元一、大河内信司 [訳]) 日本能率協会	[誰]
---	1985/01	〈欠陥翻訳時評〉総集編	
075	1985/02	アロンソン, E (1984)『ザ・ソーシャル・アニマル』(古畑和孝 [訳]) サイエンス社	[誰]
076	1985/03	アードレイ, ロバート (1978)『狩りをするサル 人間本性起源論』(徳田喜三郎 [訳]) 河出書房新社	[誰]
077	1985/04	ワトスン, ライアル (1974)『スーパーネイチュア』(牧野賢治 [訳]) 蒼樹書房	[誰]
078	1985/05	番外編 〈ハダカの王様をハダカにする〉	
079	1985/06	1985年度 大学英語入試問題	[誰] [大]
080	1985/07	サイモン, H・A (1984)『人間の理性と行動』(佐々木恒男、吉原正彦 [訳]) 文真堂	[誰]
081	1985/08	カーニイ, H (1983)『科学革命の時代 コペルニクスからニュートンへ』(中山茂、高柳雄一 [訳]) 平凡社	[誰]
082	1985/09	ネイスビッツ, ジョン (1982)『メガトレンド』(竹村健一 [訳]) 三笠書房	[誰] [特]
083	1985/10	リチャーズ, スチュワート (1985)『科学・哲学・社会』(岩坪紹夫 [訳]) 紀伊國屋書店	[誰]
084	1985/11	ラニヨン, R・P (1979)『統計で勝つ 不確実性の克服』(高	

		木秀玄 [訳]) 講談社 [誰]
085	1985/12	ビーティ, J (1979)『社会人類学 異なる文化の論理』(蒲生正男、村武精一 [訳]) 社会思想社 [誰]
086	1986/01	コールダー, ナイジェル (1983)『ハレー彗星がやってくる!』(小尾信彌 [訳]) 岩波書店 [誰] [特]
087	1986/02	欠陥翻訳再考 [誰]
088	1986/03	ブラウン, バーバラ・B (1983)『スーパーマインド 心は脳を超える』(橋口英俊 [ほか訳]) 紀伊国屋書店 [悪]
089	1986/04	ドレイク, スティルマン (1984, 1985)『ガリレオの生涯 1-3』(田中一郎 [訳]) 共立出版 [悪]
090	1986/05	アップダイク, ジョン (1984)『走れウサギ』(宮本陽吉 [訳]) 白水社 [悪]
091	1986/06	1986年度 大学英語入試問題 [悪] [大]
092	1986/07	ザイマン, J (1985)『科学理論の本質』(桜井邦朋、大江秀房 [訳]) 地人書館 [悪]
093	1986/08	マルケイ, マイケル (1985)『科学と知識社会学』(堀喜望 [ほか訳]) 紀伊國屋書店 [悪]
094	1986/09	番外編 (6月号に対する明治大学英語出題委員の解答/7月号訳者とのやりとり) [悪] [大]
095	1986/10	エックルス, J・C (1984)『脳と宇宙への冒険 人間の神秘』(鈴木二郎 [訳]) 海鳴社 [悪]
096	1986/11	ウィルソン, B・R (1982)『カリスマの社会学 気高き未開人』(山口素光 [訳]) 世界思想社 [悪]
097	1986/12	クーパー, レオ (1986)『ジェノサイド 20世紀におけるその現実』(高尾利数 [訳]) 法政大学出版局 [悪]
098	1987/01	ポラニー, マイケル (1986)『人間の研究』(沢田允夫、吉田謙二 [ほか訳]) 晃洋書房 [辛]
099	1987/02	アボット, E・A (1977)『二次元の世界 平面の国の不思議な物語』(高木茂男 [訳]) 講談社 [悪]

100	1987/03	第100回記念特別講演	[悪]
101	1987/04	スティール, ロバート・S (1986)『フロイトとユング』(久米博、下田節夫 [訳]) 紀伊国屋書店	[悪]
102	1987/05	ガードナー, マルティン (1978)『メイトリックス博士の驚異の数秘術』(一松信 [訳]) 紀伊国屋書店	[悪]
103	1987/06	1987年度 大学英語入試問題	[悪] [大]
104	1987/07	スタナード, D・E (1985)『歴史を精神分析する フロイトと心理歴史学の失敗』(南博 [訳]) 岩波書店	[悪] [特]
105	1987/08	フェリス, ポール (1986)『ザ・マスター・バンカー 国際金融市場を支配するのは誰か』(東力 [訳]) ダイヤモンド社	[悪]
106	1987/09	マーチー, ガイ (1986)『生命の七つの謎 交感する生物・地球・宇宙』(吉松広延 [ほか訳]) 白揚社	[悪]
107	1987/10	デービス, P・J、R・ヘルシュ (1986)『数学的経験』(柴垣和三雄、清水邦夫、田中裕 [訳]) 森北出版	[悪]
108	1987/11	メトカーフ、ハンティントン (1985)『死の儀礼 葬送習俗の人類学的研究』(池上良正、川村邦光 [訳]) 未来社	[悪]
109	1987/12	ストロング, ロイ (1987)『ルネサンスの祝祭 王権と芸術上・下』(星和彦 [訳]) 平凡社	[穴]
110	1988/01	ストラヴィンスキー (1981)『ストラヴィンスキー自伝』(塚谷晃弘 [訳]) 全音楽譜出版社	[穴] [特]
111	1988/02	モウワット, ファーレイ (1977)『オオカミよ、なげくな』(小原秀雄、根津真幸 [訳]) 紀伊国屋書店	[穴] [特]
112	1988/03	ホーソン (1955)『緋文字 改版』(佐藤清 [訳]) 岩波書店	[穴] [特]
113	1988/04	ローレンス, D・H (1964)『チャタレイ夫人の恋人』(伊藤整 [訳]) 新潮社	[穴] [特]
114	1988/05	番外編〈悪役の根源〉	[穴]
115	1988/06	1988年度 大学英語入試問題	[穴] [大]

116	1988/07	ブロンテ, エミリ (1960, 1961) 『嵐が丘 上・下』 (阿部知二 [訳]) 岩波書店 [穴] [特]
117	1988/08	イニス, ハロルド・A (1987) 『メディアの文明史 コミュニケーションの傾向性とその循環』 (久保秀幹 [訳]) 新曜社 [穴]
118	1988/09	クライン, モーリス (1984) 『不確実性の数学 数学の世界の夢と現実 上・下』 (三村護、入江晴栄 [訳]) 紀伊国屋書店 [穴]
119	1988/10	アシモフ, アイザック (1984) 『ファウンデーションの彼方へ 銀河帝国興亡史4』 (岡部宏之 [訳]) 早川書房 [穴]
120	1988/11	バーガー, P・L (1979) 『社会学への招待』 (水野節夫、村山研一 [訳]) 思索社 [穴]
121	1988/12	グラス, ベントレー [ほか編] (1988) 『進化の胎動 ダーウィンの先駆者たち1745-1859』 (谷秀雄 [監訳]) 大陸書房 [穴]
122	1989/01	アイヴィンス, ウィリアム (1984) 『ヴィジュアルコミュニケーションの歴史』 (白石和也 [訳]) 晶文社 [穴]
123	1989/02	ゴッフマン, アーヴィング (1986) 『儀礼としての相互行為 対面行動の社会学』 (広瀬英彦、安江孝司 [訳]) 法政大学出版局 [穴]
124	1989/03	ローウィック, G・P (1986) 『日没から夜明けまで アメリカ黒人奴隷制の社会史』 (西川進 [訳]) 刀水書房 [穴]
125	1989/04	Sindermann, Carl J. (1988) 『成功するサイエンティスト 科学の喜び』 (山本祐靖、小林俊一 [訳]) 丸善 [穴]
126	1989/05	ソーロー (1979) 『森の生活 ウォールデン 改版』 (神吉三郎 [訳]) 岩波書店 [穴]
127	1989/06	1989年度 大学英語入試問題 [大]
128	1989/07	番外編 〈時評への反応さまざま〉 [穴]
129	1989/08	エリクソン, エリク・H (1982) 『自我同一性 新装版』 (小

		此木啓吾 [訳編]) 誠信書房 [嘘] [特]
130	1989/09	ボールディング, ケネス・E (1988) 『トータル・システム ニューアカデミーの確立』 (高村忠成 [ほか訳]) 第三文明社 [嘘]
131	1989/10	ムーニー, ジェイムズ (1989) 『ゴースト・ダンス アメリ カ・インディアンの宗教運動と叛乱』 (荒井芳広 [訳]) 紀伊国 屋書店 [嘘]
132	1989/11	ホークス, H、J・マクブライド (1989) 『監督ハワード・ ホークス「映画」を語る 新装版』 (梅本洋一 [訳]) 青土社 [嘘]
133	1990/01	ジュラード, シドニー・M (1974) 『透明なる自己』 (岡堂哲 雄 [訳]) 誠信書房 [嘘]
134	1990/02	フロム, エーリッヒ (1959) 『愛すること』 (懸田克躬 [訳]) 紀伊国屋書店 [嘘]
135	1990/03	ウォーカー, ジョン・A (1987) 『マス・メディア時代のア ート ポスト・モダンを超えて』 (梅田一穂 [訳]) 柘植書房 [嘘]
136	1990/04	マリノフスキー, B、J・デ・ラ・フエンテ (1987) 『市の 人類学』 (信岡奈生 [訳]) 平凡社 [嘘]
137	1990/05	ハーディング, M・エスター (1985) 『女性の神秘 月の神 話と女性原理』 (樋口和彦、武田憲道 [訳]) 創元社 [嘘]
138	1990/06	1990年度 大学英語入試問題 [嘘] [大]
139	1990/07	ロバーツ, ウェス (1990) 『アッティラ王が教える究極のリ ーダーシップ』 (山本七平 [訳]) ダイヤモンド社 [辛] [特]
140	1990/08	ボールディング, K・E [編] (1989) 『ヒューマン・ベター メントの経済学 生活の質へのアプローチ』 (嵯峨座晴夫 [監 訳]) 勁草書房 [嘘]
141	1990/09	デュボス, ルネ (1977) 『健康という幻想 医学の生物学的 変化 新装版』 (田多井吉之介 [訳]) 紀伊国屋書店 [嘘]

142	1990/10	ローザック, セオドア (1989)『コンピュータの神話学』(成定薫、荒井克弘 [訳]) 朝日新聞社 [嘘]
143	1990/11	プリマック, デイビッド (1989)『ギャバガイ 動物言語の哲学』(西脇与作 [訳]) 産業図書 [嘘]
144	1990/12	アサジョーリ, R (1989)『意志のはたらき』(国谷誠朗、平松園枝 [訳]) 誠信書房 [辛]
145	1991/02	グールド, スティーヴン・J (1989)『人間の測りまちがい 差別の科学史』(鈴木善次、森脇靖子 [訳]) 河出書房新社 [嘘]
146	1991/03	ベノクレイティス, ニジョーレ・V、ジョー・R・フィーギン (1990)『セクシャル・ハラスメントの社会学 モダン・セクシズム』(千葉モト子 [訳]) 法律文化社 [嘘]
147	1991/04	ウィルソン, コリン (1985)『ユング——地下の大王』(安田一郎 [訳]) 河出書房新社 [嘘]
148	1991/05	ツインコータ、ウォロノフ (1989)『ジャパニーズマーケット 日本市場は閉鎖的か』(鈴木武 [監訳]) 同文館出版 [嘘]
149	1991/06	ブロス, ピーター (1990)『息子と父親 エディプス・コンプレックス論をこえて 青年期臨床の精神分析理論』(児玉憲典 [訳]) 誠信書房 [嘘]
150	1991/07	1991年度 大学英語入試問題 [辛] [大]
151	1991/08	ベイツ, ヘンリー・ウォルター (1990)『アマゾン河の博物学者』(長澤純夫 [訳]) 思索社 [辛]
152	1991/09	150回記念お手盛り講演会 [辛]
153	1991/10	ジェイ, マーティン (1989)『永遠の亡命者たち 知識人の移住と思想の運命』(今村仁司、藤澤賢一郎、竹村喜一郎、笹田直人 [訳]) 新曜社 [辛]
154	1991/11	ゲルナー, アーネスト (1991)『イスラム社会』(宮治美江子、堀内正樹、田中哲也 [訳]) 紀伊國屋書店 [辛]
155	1991/12	ワッツ, アラン (1985)『心理療法東と西 道の遊び』(滝野

		功 [訳]) 誠信書房 [辛]
156	1992/02	バーンスタイン, マイケル・A (1991) 『アメリカ大不況 歴史的経験と今日的意味』(益戸欽也、鵜飼信一 [訳]) サイマル出版会 [辛]
157	1992/03	モリス, デズモンド (1990) 『動物との契約 人間と自然の 共存のために』(渡辺政隆 [訳]) 平凡社 [辛] [特]
158	1992/04	ハワード, ジョナサン (1991) 『ダーウィン 進化理論の確 立者』(山根正気、小河原誠 [訳]) 未来社 [辛]
159	1992/05	スタイン, ガートルード (1978) 『三人の女』(富岡多恵子 [訳]) 中央公論社 [辛] [特]
160	1992/06	1992年度 大学英語入試問題 [辛] [大]
161	1992/07	ハリエク, F・A (1986) 『市場・知識・自由 自由主義の 経済思想』(田中真晴、田中秀夫 [編訳]) ミネルヴァ書房 [辛]
162	1992/08	マックニュー, D [ほか] (1991) 『子どものうつ病』(栗田 広 [訳]) 晶文社
163	1992/09	スペリー, ロジャー (1985) 『融合する心と脳 科学と価値 観の優先順位』(須田勇、足立千鶴子 [訳]) 誠信書房
164	1992/10	スラック, ジェニファー・D、フレッド・フェジェス [編] (1990) 『神話としての情報社会』(岩倉誠一、岡山隆 [監訳]) 日本評論社
165	1992/11	ローゼン, C (1984) 『シェーンベルク』(武田明倫 [訳]) 岩波書店 [矢]
166	1992/12	ボバード, ジェームズ (1992) 『アメリカ貿易は公正か 知 られざる保護主義の全貌』(佐藤英夫 [訳]) 日本経済新聞社 [矢]
167	1993/01	キャンベル, ジョゼフ (1992) 『神の仮面 西洋神話の構造 新装版』(山室静 [訳]) 青土社
168	1993/02	ド・クライフ, ポール (1980) 『微生物の狩人』(秋元寿恵夫 [訳]) 岩波書店 [矢]

169	1993/03	マッカーナ, プロインシアス (1991)『ケルト神話』(松田幸雄 [訳]) 青土社 [矢]
170	1993/04-5	ローゼン, P (1986)『フロイトの社会思想 政治・宗教・文明の精神分析』(馬場謙一、小松啓 [訳]) 誠信書房
171	1993/06	コリンズ, R (1988)『マックス・ウェーバーを解く』(寺田篤弘、中西茂行 [訳]) 新泉社
172	1993/07	ホアウッド, ウィリアム (1991)『スカヤグリーグ 愛の再生 上・下』(矢野徹、藤井久美子 [訳]) 角川書店 [矢]
173	1993/08	1993年度 大学英語入試問題 [大]
174	1993/09	スワンウィック, キース (1992)『音楽と心と教育 新しい音楽教育の理論的指標』(野波健彦 [ほか訳]) 音楽之友社
175	1993/10	ヒルトン, ティモシー (1992)『ラファエル前派の夢』(岡田隆彦、篠田達美 [訳]) 白水社 [矢]
176	1993/11	マレー, P (1991)『イタリア・ルネッサンスの建築』(長尾重武 [訳]) 鹿島出版会 [矢]
177	1993/12	マクドナルド, デイヴィッド (1993)『野ギツネを追って』(池田啓 [訳]) 平凡社 [矢]
178	1994/01	ブリス, マイケル (1993)『インスリンの発見』(堀田饒 [訳]) 朝日新聞社
179	1994/02	ポーリット, ジョナサン (1991)『地球は救える 環境保護へのシナリオ』(筑紫哲也 [訳]) 小学館 [矢]
180	1994/03	ビショップ, J・E、M・ウォルドホルツ (1992)『遺伝子の狩人』(牧野賢治、瀬尾隆、秦洋一 [訳]) 化学同人
181	1994/04	サマーソン, J (1993)『18世紀の建築 バロックと新古典主義』(堀内正昭 [訳]) 鹿島出版会
182	1994/05	パークス, C・M (1993)『死別 遺された人たちを支えるために』(桑原治雄、三野善央、曾根維石 [訳]) メディカ出版 [矢]
183	1994/06	エーリック, ポール、アン・エーリック (1992)『絶滅のゆ

		くえ 生物の多様性と人類の危機』(戸田清、青木玲、原子和恵 [訳]) 新曜社
184	1994/07	ソロモン, ジャック (1992) 『アメリカの素顔 文化に見るモザイク模様』(武内道子 [訳]) 丸善 [矢]
185	1994/08	1994年度 大学英語入試問題 [大]
186	1994/09	コールズ, ブライアニ, ジョン・コールズ (1994) 『低湿地の考古学 湿原の古代人たち』(河合信和 [訳]) 雄山閣 [矢]
187	1994/10	ヘイリー, アーサー (1973) 『大空港』(武田公子、大坪光之 [訳]) 早川書房 [矢]
188	1994/11	パウエル, T・G・E (1990) 『ケルト人の世界』(笹田公明 [訳]) 東京書籍
189	1994/12	ウォード, ピーター・D (1993) 『メトセラの軌跡——生きた化石と大量絶滅』(瀬戸口烈司、原田憲一、大野照文 [訳]) 青土社
190	1995/01	ストー, アンソニー (1994) 『孤独——自己への回帰』(森省二、吉野要 [監訳]) 創元社 [矢]
191	1995/02	カーティス, W・J・R (1990) 『近代建築の系譜 1900年以後 上・下』(五島朋子、澤村明、末廣香織 [訳]) 鹿島出版会
192	1995/03	ゲティングズ, フレッド (1993) 『猫の不思議な物語』(松田幸雄、鶴田文 [訳]) 青土社
193	1995/04	ハーシー, ^[ママ] J (1993) 『古典建築の失われた意味』(白井秀和 [訳]) 鹿島出版会
194	1995/05	番外編 〈楽屋裏噺〉 [矢]
195	1995/06	番外編 〈クイズ大会〉 [矢]
196	1995/07	ブラック, クラウディア (1989) 『私は親のようにならない アルコホリックの子供たち』(斎藤学 [監訳]) 誠信書房
197	1995/08	番外編 〈クイズ大会後始末〉 [矢]
198	1995/09	1995年度 入学試験英語問題 [大]

199	1995/10	ツィンマー, ハイน์リッヒ (1988) 『インド・アート——神話と象徴』 (宮元啓一 [訳]) せりか書房
200	1995/11	200回をかえりみる [矢]
201	1995/12	ミル, J・S (1971) 『自由論』 (塩尻公明、木村健康 [訳]) 岩波書店
202	1996/01	エーレンライク, バーバラ (1995) 『「中流」という階級』 (中江桂子 [訳]) 晶文社 [矢]
203	1996/02	ラッセル, ロバータ、R・D・レイン (1994) 『愛のレッスン レインと私』 (岸良範、若山隆良 [訳]) 新曜社 [矢]
204	1996/03	スミス, W・O・レスター (1958) 『教育入門』 (周郷博 [訳]) 岩波書店
205	1996/04	ユング, C・G [ほか] (1975) 『人間と象徴 無意識の世界』 (河合隼雄 [監訳]) 河出書房新社
206	1996/05	『教育入門』 クイズ正解者発表
207	1996/06	ルーシー＝スミス, E (1987) 『1930年代の美術 不安の時代』 (多木浩二、持田季未子 [訳]) 岩波書店
208	1996/07	ルモニック, マイケル・D (1994) 『宇宙論の危機 新しい観測事実に揺れる現代宇宙論の最前線』 (小林健一郎 [訳]) 講談社
209	1996/08	1996年度 大学入試英語問題 [大]
210	1996/09	番外編 〈「ほとんど不思議」の不思議〉
211	1996/10	ハイジック, ジェームズ (1985) 『ユングの宗教心理学——神の像をめぐる』 (瀬瀬康兵、渡辺学 [訳]) 春秋社
212	1996/11	ストラム, シャーリ・C (1989) 『人とヒヒはどこまで同じか』 (榎本知郎 [訳]) どうぶつ社
213	1996/12	ホブハウス, ヘンリー (1987) 『歴史を変えた種 人間の歴史を創った5つの植物』 (阿部三樹夫、森仁史 [訳]) パーソナルメディア
214	1997/01	マッカーナ, プロインシアス (1991) 『ケルト神話 [第五刷]』

		(松田幸雄 [訳]) 青土社
215	1997/02	番外編〈一九九七年新春翻訳クイズ〉
216	1997/03	カートミル, マット (1995) 『人はなぜ殺すか——狩猟仮説と動物観の文明史』(内田亮子 [訳]) 新曜社
217	1997/04	番外編〈新春翻訳クイズ解答〉
218	1997/05	ジェコブス, J (1977) 『アメリカ大都市の死と生』(黒川紀章 [訳]) 鹿島出版会
218'	1997/06	番外編〈訴訟? So sure? 〉
219	1997/07	アドラー, アルフレート (1984) 『人生の意味の心理学』(高尾利数 [訳]) 春秋社
220	1997/08	1997年度 大学英語入試問題
221	1997/09	ラザルス, リチャード・S、スーザン・フォルクマン (1991) 『ストレスの心理学 認知的評価と対処の研究』(本明寛 [ほか監訳]) 実務教育出版
222	1997/10	ジャーシルド, A (1975) 『自己を見つめる 不安の解決と共感』(船岡三郎 [訳]) 創元社
223	1997/11	番外編〈腕だめし長難解クイズ〉
224	1997/12	ストリンガー, クリストファー、クライヴ・ギャンブル (1997) 『ネアンデルタール人とは誰か』(河合信和 [訳]) 朝日新聞社
225	1998/01	ドニントン, ロバート (1995) 『オペラとその象徴 モンテヴェルディからヴァーグナーまでの舞台表現』(佐竹淳 [訳]) 音楽之友社
226	1998/02	番外編〈超難解クイズ解説〉
227	1998/03	番外編〈超難解クイズ解説 (つづき)〉
228	1998/04	キャンベル, ジョゼフ (1984) 『千の顔をもつ英雄』(平田武靖、浅輪幸夫 [監訳]) 人文書院
229	1998/05	デュバル, デヴィッド (1995) 『ホロヴィッツの夕べ』(小藤隆志 [訳]) 青土社

230	1998/06	番外編〈翻訳クイズ〉
231	1998/07	ロウ, C、F・コッター (1992)『コラージュ・シティ』(渡辺真理 [訳]) 鹿島出版会
232	1998/08	1998年度 大学入学試験英語問題
233	1998/09	番外編〈翻訳クイズ解答〉
234	1998/10	カーニー, レイモンド (1997)『カサヴェテスの映したアメリカ 映画に見るアメリカ人の夢』(梅本洋一 [訳]) 勁草書房
235	1998/11	老兵は死なず……

以上、通算238回、うち第二回、第六回、第十四回、第十六回は別の執筆者。

⁷ ブームなるものの常とも言おうか、追隨するものは最初のものに似て非なるものであった。この項において後に述べるように、〈知識〉の問題とするか〈技術〉の問題とするかという違いははなはだ大きな点で、およそ追隨者や一般の読者は〈知識〉の問題として扱い、それが〈誤訳指摘〉についての悪印象を生みだした。ほんのかすかな疵でさえも問題にされ、良き翻訳ですら悪きものとする風潮が一部であったことも否めない。自らの〈知識〉のひけらかしの道具にされることもあったし、ただ〈知識人〉を叩いて優越感に浸るだけの輩が多かったとしても、不思議なことではないだろう。この〈誤訳指摘〉ブームによる翻訳への悪印象から〈再話弾圧〉および〈超訳騒動〉へ至る流れは、改めて検証されなければならない出来事のひとつである。

⁸ この「欠陥翻訳時評」を、一種の告発型消費者運動と見る向きもあるかもしれない。しかし、別宮本人の発言にもあるように、その型を無批判で当てはめるのはいささか危険である。

よくひとに翻訳界のラルフ・ネイダーといわれたり紹介されたりする。こんな話〔翻訳トラブルの調停役を頼まれること〕を持ちこまれるのもそういう思いこみがあるからだろうが、それはぼくにとって少なからず迷惑でもある。ラルフ・ネイダーは、無力な消費者に代わって企業を相手どり、欠陥商品を摘発して回収させたり謝罪させたりすれば、それで

勝ったということになるのだろう。しかしぼくはそんな形で企業つまり出版社と対決の姿勢にあるわけではない。ぼく自身読者であると同時に、翻訳を供給する側——つまり、みずから翻訳したり、翻訳者を養成したりする側にも属しているわけで、翻訳書を批評し、訳者・編集者を批判するその刃は、常に自分自身にも向けられている。とっちめて凱歌をあげ、万歳、万歳——そんなものではない。(別宮 1988: 134)

ラルフ・ネイダーらが推進力となった告発型消費者運動では、どちらかというところ、告発にはじまった、安全のための立法運動や行政への働きかけが重要視される。この別宮の活動が法律や行政へ何らかの大きな影響を与えたとは思えないし、欠陥翻訳を監視するための消費者団体が設立されたわけでもない。それよりはネイダー以前の〈商品テスト〉を基調とする消費者運動の方が、別宮のスタンスに近いと言えよう。

⁹ この揺れには二面性がある。ひとつには、翻訳の〈商品性〉と〈理想〉の間の揺れ。もうひとつには、〈無意識的〉な措定ミスと〈意識的〉な措定が別宮の〈理想〉から外れているとする翻訳との揺れ。このあたりが、別宮の中では厳密な区別が設けられていない。そのため、しばしば論旨が一定しない。

別宮の対象となる〈欠陥翻訳〉には二種類あるとみていいだろう。

- (1) 翻訳者に翻訳技術がなく、起点言語の措定かつ目標言語の措定がうまく行かず、不安定に訳出され、別宮の〈基準措定〉から外れてしまった目標テキスト。
- (2) 翻訳者に技術および能力があり、安定的に訳出されているが、その目標言語側の措定や表現体が、別宮の〈基準措定〉から外れている目標テキスト。

そして、批判の方法にも二種類ある。

- (1) 表現体が〈読者〉から外れてしまっているために、商品として問題があるとする批判。
- (2) 表現体が〈立派な日本語〉から外れてしまっているために、翻訳として問題があるとする批判。

どちらの二面も、同じように見えて内容はずいぶん違う。対象(1)および批判(1)のパターンでは、まず商品への論理的批判として成立可能である。また、対象(1)および批判(2)の場合も、やや難があるとはいえ、焦点は翻訳者の技術不足なので、成立可能だろう。また、対象(2)および批判(1)についても、商品論を徹底させれば、十分成立可能である。だが、対象(2)と批判(2)の組み合わせは、主観的意見同士の不毛な論争に発展する可能性がある。

この「欠陥翻訳時評」の場合、ほとんどが対象(1)×批判(1)か、対象(1)×批判(2)のパターン、あるいは批判(1)(2)の混在に当てはまる。

たとえば第一回、第四回、第五回の『不確実性の時代』では、論旨は最終的に批判(2)から批判(1)へ着地している。

この翻訳が日本語として落第で、普通の日本人には通じないところが多々あり、原著の平明さ、ユーモアとはおよそうらはらの文体で書かれていることを知ったら、ガルブレイス氏はどんな顔をされるだろうか。[中略] 逐語訳でただ字づらの正確さ（[中略]）を求めることを主義として堂々と主張されるなら、商品価値はともかく、それも一つの姿勢としては認められるべきかもしれない。しかしそれならそれで文体がどうのこうのとかっこうのいいことをいうべきではなかろう。また「経済学分野」のためだけに印刷されたものなら、適当にその方々だけで感激なり検討なり私信のやりとりなどなさっていればいいことで、われわれは余計な口をはさまないが、実情は、ものすごい宣伝費をかけて（としか想像されない）大衆めあてに売りこんでいらっしゃる（それは、出版社のほうで、訳者は一応関係ないでしょうが）。そうするとやはり買わされた方の迷惑も考えなくてはならなくなる。（別宮 1981a: 48-49）

このように、ベストセラーとなるべくして売られた書籍が、まったく読めない代物であったとき、この批判(1)は絶大な破壊力を有する。結果としてこの『不確実性の時代』は、講談社文庫から再刊された際、斎藤精一郎という別の訳者によって訳し直されている。

ただ、対象(2)×批判(2)のはなはだ根拠に甘い回が存在することも事実である。そのごく少ない例のひとつ（厳密にはたったひとつの例かもしれない）が、連載もずいぶん後期の第百六十一回、ハイエク『市場・知識・自由』。別宮本人も取り上げながら「いわゆる誤訳はまったくないと言っていいくらい」（別宮 1993: 215）とし、文章が〈日本語〉から見て悪文である、つまりこなれた〈日本語〉になっていないという理由だけで批判された本である。こういったとき、「ハイエクに失礼」だとか、「ハイエクはこう書かなかった」として起点テキスト、起点言語措定のみで批判するのは、学術的に考えた場合、批判の根拠はいささか薄い。また、この本がミネルヴァ書房という専門書を中心に販売する出版社ということからも、目標言語側の表現体から指摘するのは不適切とも言えよう。もちろん、一般向けの大量販売をすとか、啓蒙書として売るとかなら、別宮の〈読者を限定してしまうような表現体に訳出してしまうことがよくない〉という意見にも筋が通るだろう。だが、もし出版社の戦略として、売りたい読者層がいて、その表現体はその層に一致していたとき、このような批評のやり方が妥当なのだろうか。別宮は、〈読者〉〈消費者〉を向いて翻訳をせよ、というように、表現体の重要性を説いたが、その〈読者〉は決して様なものではあるまい。

言語措定に対して意識のない訳者に対して、つまり対象(1)に対しての批評としては問題がないのだが、対象(2)に対しては、どういう商品なのか、というところを考えなくてはどうにもしようもない。連載から『続 誤訳 迷訳 欠陥翻訳』にまでもつれ込んだ『国富論』にまつわる論争（『翻訳と批評』にも収録）は、別宮の批判姿勢からくる失敗と考えてもよいのではなかろうか。商品論ではなく、翻訳論で争ってしまったところに、議論が平行線をたどった原因がある。

この論争の過程を追うと、次のようにまとめられる。

連載第三十九回 別宮——翻訳の文体についての批判

連載第四十四回 水田——単なる誤訳指摘への反論、訳文生硬は意図的

” 別宮——誤訳指摘の再反論、日本語論理の主張、〈読者〉

基準の提示

単行本追加収録 水田——別宮との措定差の指摘、絶対主義批評の拒否、翻訳（文体）の相対主義の主張

” 別宮——相対主義の確認、なお〈普遍的読者〉の主張

一般読者から一連の議論を読めば、別宮の方が理があるように思えるかもしれないが、学問的に考えるなら、水田の方に分がある。この議論でわかるのは、水田はおよそ「欠陥翻訳時評」で取り上げられるような、翻訳の〈技術〉に意識もなければ哲学もない、翻訳能力に欠けた翻訳者ではない、ということである。かなり意図的に訳文を生硬にこしらえ、起点テキストを〈他者〉と位置づけ、一貫して〈わからないもの〉という態度を取っている。

もし商品論から勝負をかけるなら、一般的な〈日本語〉という措定を外したことが、商品として妥当かどうかである。しかしこの場合、作品が古典であり著作権が切れていること、すでに他の訳で〈こなれた〉ものがあることから、逐語訳的翻訳が存在して悪いということは一概に言えない。もし翻訳権独占で、その翻訳によって様々な人々が理解する道を閉ざしてしまうのであれば、批判の対象にもできるだろう。そのときは〈生硬な〉翻訳の代わりに〈こなれた〉翻訳を、あるいは〈生硬な〉ものと〈こなれた〉ものをふたつ出版せよ、という指摘も可能だろう。もしくは、出版元の河出書房新社、あるいは現在、水田版（監訳とされているが実際に行ったのは水田本人なので）を出版している岩波書店の出版戦略を問う、という形でも批判はできるし、建設的な意見として〈逐語訳〉の表紙記載を求めることもできるだろう。

だが、翻訳相対主義を認めたあとで、別宮が再度〈普遍的読者〉を根拠として、水田〈個人〉の思想を批判しようとするのは、いささか妥当性に欠ける。別宮は「ものには限度がある」というが、もちろん相対主義を認めた上でも、もし措定が不十分で目標テキストが不安定なら、翻訳者の技術不足と批判することはできる。だが、当の水田は措定も表現体も安定している。なによりその措定を取る、表現体を取るに至るまでの、思考と決定をしっかりと有している。あくまで自分が絶対主義ではないという主張をするとしても、それでは別宮の

〈相対主義〉の幅が狭い、と言われても仕方がないのではないか。

参考文献

- 内田魯庵（1983）『『罪と罰』の新譯及び舊譯出版時代の回想』『内田魯庵全集 第三卷』ゆまに書房
- （1984a）『翻譯熱流行を望む』『内田魯庵全集 第一卷』ゆまに書房
- （1984b）『適堂生に謝し我が翻譯に於ける經驗及び一家言を述ぶ』『内田魯庵全集 第一卷』ゆまに書房
- （1984c）『原文の印象と譯文の趣致』『内田魯庵全集 第六卷』ゆまに書房
- （1984d）『翻譯文と文章の進歩發展』『内田魯庵全集 第六卷』ゆまに書房
- （1987）『翻譯文に就て』『内田魯庵全集 補卷3』ゆまに書房
- 大山定一、吉川幸次郎（1969）『洛中書問——大山定一氏と共に——』『決定版 吉川幸次郎全集第十九卷』筑摩書房
- 尾形尊信（1998）『英語の誤訳 開国が生んだ言葉の誤解』丸善
- 菊池義明（1995）『誤訳・悪訳・珍訳大研究 間違いだらけの翻訳を糾す！』日本実業出版社
- （1997）『これでいいのか、翻訳本！——ベストセラーの読み方・正しい訳し方——』南雲堂
- ギル、ロビン（1987）『誤訳天国——ことばの **PLAY** と **MISPLAY**——』白水社
- グロータース、W・A、柴田武〔訳〕（1979）『誤訳 新版』三省堂
- 河野一郎（1975）『翻訳上達法』講談社
- （1982）『翻訳教室』講談社
- （1999）『翻訳のおきて』DHC
- 古賀正義（1983）『推理小説の誤訳』サイマル出版会
- 国民生活センター〔編〕（1997）『戦後消費者運動史』大蔵省印刷局
- 小鷹信光（2001）『翻訳という仕事』筑摩書房
- 佐藤紘彰（1993）『アメリカ翻訳武者修行』丸善
- （1996）『訳せないもの 翻訳にからめた文化論』サイマル出版会
- 佐藤亮一（1987）『翻訳騒動記』政界往来社
- 竹内謙二（1964）『誤訳 大学教授の頭の程』（高橋正雄〔編〕）有紀書房
- 張明澄（1967）『誤訳・愚訳（漢文の読めない漢学者たち！）』久保書店
- 鳥飼玖美子（1998）『ことばが招く国際摩擦』ジャパントイムズ
- 直井明（2003）『海外ミステリ誤訳の事情』原書房
- 中原道喜（2003）『誤訳の構造』聖文新社
- 中村保男（1973a）『翻訳の技術』中央公論社
- （1973b）『英語学習と翻訳家への道——随筆ふうにな——』『季刊翻訳 1973 No. 2』みき書房
- 、谷田貝常夫（1978）『英和翻訳表現辞典』研究社出版
- 、谷田貝常夫（1980）『英和翻訳表現辞典（Ⅱ）』研究社出版
- （1982a）『翻訳の秘訣 理論と実践』新潮社

- 、谷田貝常夫 (1982b) 『英和翻訳表現辞典 (Ⅲ)』 研究社出版
- (1983) 『翻訳はどこまで可能か 日本語と英語のダイアログ』 ジャパンタイムズ
- 、谷田貝常夫 (1984) 『英和翻訳表現辞典 増訂合本』 研究社出版
- (1989) 『名訳と誤訳』 講談社
- (1992) 『現代翻訳考 [超訳・名訳・誤訳を読む]』 ジャパンタイムズ
- (1994) 『続 英和翻訳表現辞典』 研究社
- (2001) 『創造する翻訳——ことばの限界に挑む』 研究社
- (2002) 『新編 英和翻訳表現辞典』 研究社
- (2003) 『英和翻訳の原理・技法』 日外アソシエーツ
- 野村喜和夫 (1996) 「ベンヤミンのひそみにならって」 『現代詩手帖 7月号 (第39巻・第7号)』 思潮社
- 東田千秋 (1981) 『直訳という名の誤訳——英語読書作法』 南雲堂
- 廣西元信 (2002) 『資本論の誤訳』 (国分幸 [編]) こぶし書房
- 別宮貞徳 (1973) 「翻訳を考える」 『季刊翻訳 1973 No. 1』 みき書房
 - (1975) 『翻訳を学ぶ』 八潮出版社
 - (1979) 『翻訳読本 初心者のための八章』 講談社
 - (1980) 『翻訳の初歩——英文和訳から翻訳へ——』 ジャパンタイムズ
 - (1981a) 『誤訳 迷訳 欠陥翻訳』 文藝春秋
 - (1981b) 「Art としての翻訳」 『英語青年 12月号 第127巻第9号』 研究社
 - (1983a) 『続 誤訳 迷訳 欠陥翻訳』 文藝春秋
 - (1983b) 『英文の翻訳 スタンダード英語講座第1巻』 大修館書店
 - (1985a) 『こんな翻訳読みたくない』 文藝春秋
 - (1985b) 『翻訳と批評』 講談社
 - (1986) 『こんな翻訳に誰がした』 文藝春秋
 - (1988) 『悪いのは翻訳だ——あなたのアタマではない』 文藝春秋
 - (1989) 『翻訳の落とし穴』 文藝春秋
 - (1991) 『翻訳はウソをつく』 文藝春秋
 - (1993) 『誤訳 悪訳 欠陥翻訳 ベック剣士の激辛批評』 バベル・プレス
 - (1994) 『誤訳辞典 (新装版)』 バベル・プレス
 - (1996a) 『特選 誤訳 迷訳 欠陥翻訳』 筑摩書房
 - (1996b) 『やっぱり、誤訳だったのか! ——欠陥翻訳時評』 ジャパンタイムズ
 - (1996c) 『欠陥だらけの大学英語入試』 マガジンハウス
 - (1998) 「欠陥翻訳時評——235 老兵は死なず……」 『翻訳の世界 1998年12月号 通算309号』 バベル・プレス
 - (2004) 『トリヴィア・トリヴィオールム』 南窓社
- 堀内克明 (1989) 『誤訳パトロール』 大修館書店
- 増田富壽 (1985) 『誤訳と誤解』 早稲田大学出版部
- 宮田昇 (1968) 『戦後翻訳出版の変遷 東は東、西は西』 早川書房
 - (1976) 『翻訳出版の実務』 出版同人

- (1995) 『新・翻訳出版事情——著作権の周辺——』 日本エディタースクール出版部
- (1999) 『翻訳権の戦後史』 みすず書房
- (2000) 『戦後「翻訳」風雲録——翻訳家が神だった時代——』 本の雑誌社
- (2003) 『学術論文のための著作権Q & A——著作権法に則った「論文作法」』 東海大学出版会
- (2004) 「やりたくない商売」『北村太郎を探して』(北冬舎編集部[編]) 北冬舎
- 森林太郎 (1972) 「訳本ファウストに就いて」『鷗外全集 第十二巻』 岩波書店
- (1973a) 「翻訳に就いて」『鷗外全集 第二十六巻』 岩波書店
- (1973b) 「亡くなった原稿」『鷗外全集 第二十六巻』 岩波書店
- (1973c) 「戯曲の翻訳法を説いて或る批評家に示す」『鷗外全集 第二十二巻』 岩波書店
- (1975) 「「即興詩人」時代と現時の翻訳」『鷗外全集 第三十八巻』 岩波書店
- 柳父章 (1972) 『翻訳語の論理——言語にみる日本文化の構造』 法政大学出版局
- (1974) 『比較日本語論』 日本翻訳家養成センター
- (1976) 『翻訳とはなにか——日本語と翻訳文化』 法政大学出版局
- (1977) 『翻訳の思想——「自然」と **NATURE**——』 平凡社
- (1978) 『翻訳文化を考える』 法政大学出版局
- (1982) 『翻訳語成立事情』 岩波書店
- (1983) 『翻訳学問批判 日本語の構造、翻訳の責任』 日本翻訳家養成センター
- (1998) 『翻訳語を読む——異文化コミュニケーションの明暗——』 丸山学芸図書
- (2001a) 『「ゴッド」は神か上帝か』 岩波書店
- (2001b) 『一語の辞典 愛』 三省堂
- (2002) 『秘の思想 日本文化のオモテとウラ』 法政大学出版局
- (2004a) 『近代日本語の思想 翻訳文体成立事情』 法政大学出版局
- (2004b) 「兆民はなぜ『民約訳解』を漢文で訳したか」『國文學——解釈と教材の研究——平成16年9月号』 學燈社
- 横井忠夫 (1971) 『誤訳 悪訳の病理・ミスを防ぐための α から ω まで』 現代ジャーナリズム出版会